NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 08

証言しない原本

THE ORIGINAL THAT WOULD NOT TESTIFY

原本を召喚することはできなかった。その証人なら、呼び出すことができた。

雨水会社の使者は車を使わずに現れた。下層の歩道を歩いてきたのだ。汚染された水路は、人々の頭上を走る防潮壁に閉じ込められていた。その壁をどこに造るかについて、そこに住む人々が投票を許されたことは一度もない。使者の手にあるケースは細長く、白かった。封印に集まった水は、痕跡を残さず滑り落ちた。

ナディラは、四十年間、部屋の外へ一度も映像を送信していないカメラで、その女を監視した。映像は銅線一本で画面まで運ばれている。使者は扉の前で立ち止まり、機械式の緑のランプが灯るのを待って、浮き彫りの番号があるセルロースの紙を差し出した。質問をしてはならない、と命じられていた。

「三十八時間、十二分」イレーナが言った。裁判所の一時保全命令が出てから、彼女が時間を数えていた。エリアス自身は、もう数えるのをやめていた。

ロイは、何世代もの修理工に使われ、表面がすり減った机の端に座っていた。壁の向こうで圧力弁が鳴る。都市の行政ネットワークには予測できないほど古い順序で開閉している。その音は、普段なら出口や人間の手、起こりうる暴力を見積もるために使う注意力の一部を占めた。彼はそのほうがよかった。

使者はケースを置いた。「当社は、指定立会人の同席を条件に検査を認めます。保管権の移転はありません。保護対象の構成物を複製する許可もありません」

「何を保護対象と呼ぶのですか」とイレーナ。

「裁判所が提出を命じていないもの、すべてです」

訴訟で十分に磨かれた言葉だった。イレーナはインクで受領書に署名した。使者は、重いものでも押すようにケースを手の幅だけこちらへ寄せ、退出した。

足音が完全に消えるまで、誰も蓋を開けなかった。

白いケースには台帳、細い光学ストリップ、そして一通の書簡が入っていた。宛先はロイでもエリアスでもなく、裁判所の臨時証拠担当官だった。署名したのは雨水会社の最高経営責任者――レイチェル。ロイはその名を知っていた。筆跡の形を見ても、記憶は戻らなかった。ただ、何を認識したのか言葉にできないまま認識したときの、独特の不快感があった。

台帳はタイレルの原本アーカイブではなかった。冒頭にそう明記されている。企業解体後に承継された水道インフラの非常時義務についての保管用転記で、十一年の間に、管路より早く名前を変え続けた複数の機関によって注釈が加えられていた。

古い法令活字の見出しが、紙面の中央に立っていた。

《継続性の例外――生きたシステム》

イレーナは二度読んだ。「医療上の分類じゃない」

「違う」ナディラが言う。「誰に停止を命じる権限があるか、その例外よ」

この条項は、寿命六年の許可制度よりはるか以前の災害から生まれた。居住地区の地下にある圧力制御装置は、自律身体と人間の技師によって共同運用されていた。非常時に統治機関が非人間のアクセス権を一斉に取り消そうとしたとき、ポンプは稼働し続けていた。アクセスを取り消せば住民が溺れる。そこで、結果の責任を実名の人間が引き受けるまでは、特定の運用者を自動切断から保護する暫定協定が結ばれた。

その協定は明確に廃止されなかった。担当部署は吸収され、分割され、再分類され、最後には自動化された。責任者である人間の名前は役職名として転記され続けた。役職は残った。人間は残らなかった。

エリアスが台帳へ身を乗り出す。「私は交通設備の技師だ。そんなポンプを操作したことはない」

「操作している必要はない」とイレーナ。「あなたの許可を短縮したのは、同じ委任経路から派生した権限なの。裁判所は、その委任に署名したのが誰か示せと言った。だからこの記録が重要なのよ」

ロイは紙の縁に触れた。指の圧力で破らないと確信するまでは、文字へ視線を落とさなかった。「命令に逆らった機械が、人を守った」

「人を守ったのは取り決めよ」とイレーナ。「道具を英雄に仕立てないようにしましょう」

ロイは手を引いた。その区別には覚えがあった。彼の力を恐れた者は彼を道具と呼んだ。彼を英雄とたたえた者もまた、彼についてほとんど何も知らなかった。

建物の外で弁が三度、筐体を打った。水路の流れが切り替わる。一瞬、部屋は眠りそこねた巨大な動物の腹の中のような音に満たされた。

＊　＊　＊

岡京の法廷は、窓のない階にあった。共和国の紋章も、提案中の世界統一機構の標章も掲げられていない。中立性のためには、いかなる国家にも属さない司法構造が必要だ――建物案内にはそう書かれていた。それでもすべての防犯扉は、どこか一つの国家が持つ契約によって開いた。

証拠担当官は、千春子という若い女性だった。市営水道の紛争を扱った経歴で任命された。水道紛争が、身体の法的地位に触れずに権利を記述できる数少ない場所になっていることには、誰も気づいていなかった。

審理は、深圳セントラルから投影された会社側弁護士の映像で始まった。レイチェル本人は出廷しない。書簡の署名は三つの別々の検証を経て証拠として認められた。しかしその検証のどれも、彼女が内容を意図したかどうかを証明してはいなかった。

政府は関連性がないとして台帳に異議を唱えた。川村室長の代理人は、指の皮膚が白くなるほど両手を組み、六年制度は許認可の仕組みであり、古い水道協定は運用上の安全措置だ、と主張した。両者は無関係だという。

千は相手が言い終わるのを待った。「それなら、二つの承認経路がどこで分かれたのか示してください」

代理人は図を出した。八十六の節点があり、人名は一つもない。証拠処理装置としてのみ出席を許された中央審査 AI は、図の投影が終わる前に四つの参照切れと一つの循環した権限付与を特定した。

代理人は処理装置の観測結果を排除するよう求めた。

「根拠は？」と千。

「機械の権利に関する案件で、機械が生成した推論だからです」

「それなら、機械が生成した承認経路を提出しないことです」

法廷は笑わなかった。最後列の技師が紙に印をつけた。その朝に記録されたすべてのものと同様に、その印もいつか記した本人に不利な証拠になるかもしれなかった。

千は会社に光学ストリップの提出を命じた。それは争われている原本アーカイブではなく、物品目録の索引だった。タイレル最後の子会社から移された箱が列挙され、エイドリアン・タイレルの個人管理下にある二台の原型治具も含まれていた。それらは譲渡不能の産業用認証設備と分類されていた。認可された代替装置を持つ機関は、もはや存在しない。

政府代理人は、その不在こそアーカイブを認証できない証拠だと主張しようとした。千は代わりに会社の書簡を読み上げた。保管用転記の検査、封印の立会い照合、どの記載がいつ複写されたかについての証言を申し出ている。消えたタイレルの私的アーカイブが復活するとは一言も主張していない。

「それだけですか」と代理人。

「彼らが所有すると言っているものは、それだけです」と千。「証拠の限界を認める証人が、だから無価値になるわけではありません」

処理装置が訴訟記録に一行を追加した。

《責任経路を、未検証の人間の主体まで追跡》

乾いて正確な文面だった。含意はそうではない。六年制度の権限が、切断について責任を負う人間を指名する義務まで継承していたなら、政府は責任を引き受けた人物を提示できない手続きで人工生命の稼働を取り消していたことになる。しかし手続きの欠陥は、永遠に生きる権利と同じではない。千も、イレーナも、切り離された端末の簡略映像を見ているロイも、それを理解していた。

エリアスが必要としているのは、時計が止まる前の一つの結果だった。政府が提出したのは図解だけだった。

＊　＊　＊

レイチェルの執務室は、浄化施設の静かな側にあった。磨かれたガラスの下を汚染水が流れ、かつて不可欠と呼ばれた粒子まで捕らえるほど細かい膜を通過してゆく。彼女の会社は清潔な水だけでなく、公共の安心も売っていた。多くの朝、その安心の売上は水そのものを上回った。

審理は真鍮のスイッチ一つで消せる物理画面に映っていた。彼女は消さなかった。背後で整備員が、廃止されたポンプの隔膜を交換している。ネットワーク上の身元を持たず、修理に異議を記録することもないポンプだ。

法律顧問の佐藤が机の傍らに立った。「あなたの証人尋問を求めてくるでしょう」

「求めればいいわ」

「雨水会社がなぜ人工生命の停止許可に関する証拠を持っているのか、尋ねられるかもしれません」

「会社が持っているのは安全協定の保管経緯に関する証拠よ。それを勝手に単純化しないで」

「違う質問なのですか」

「最初の回答を、誰かが次の制度に転記した時点では、違う質問だった」

佐藤は答えなかった。彼には入れない研究階が存在することを知っていた。雇用記録に記された彼女の年齢が、人事システムの経歴と少しだけ一致しないことも。整った無表情で椅子から立つときの姿勢変化が、ときに人間の関節には無理なほど正確であることも。法律家として、それらに声を与えないのが賢明だった。

レイチェルは封鎖された私設研究室の断片を呼び出した。化学的な軌跡が表示される。一般医療向けに販売される計測器の誤差幅より細かな単位だった。ロイの循環媒体、NIL-11 の記録だ。最近の遠隔観測から推定できるのは有効な残存量が減少していることだけで、厳密な数値ではなかった。彼の加速した反射と力は、供給元のない物質を代償に買われている。休めばエネルギーは回復する。異常な出力のため消費した物質は戻らない。

レイチェルは曲線の先を見つめた。予測は不確実な領域で終わっている。臨界値は損傷、温度、そして彼がこれから選ぶ行動によって変わる。その曖昧な区間に、彼女は日付を付けなかった。

「別の手段があります」と佐藤。「彼に連絡することも」

彼女は曲線を閉じた。「別の手段なら、いつだってあったわ」

「では、なぜ――」

「連絡は一種の権利主張なの。私がここへ来なさいと言えば、監視網のすべてに、私が彼へ命じる権利を持つと考えていることが伝わる」

彼女がロイの身体に並外れた戦術能力を残したのは、国家の工作員から生き延びるためだった。命令を下す兵士を作ったのではない。それは設計が可能になったとき、自分に誓ったことだった。だが、本人に対して交わさない誓いは、私的な誓いにすぎない。

研究室の警報が一度だけ鳴った。緊急事態ではない。彼女自身の複合組織を用いた実験で、前回の修復周期が再現できなかったのだ。小さな領域が、不完全な配列で再生していた。有機体三割、人工組織七割。その比率が無期限の継続を保証するわけではない。人型生命担当大臣が彼女は死を克服したと信じたがるなら、この実験結果を彼が見ることは決してないだろう。

彼女は二通目の文書に署名した。佐藤を台帳の物理的出所について証言する会社代表に指名するものだった。制限条項を付した。

《人格性または残存寿命に関する証言は提供しない》

佐藤は読み、顔を上げた。「逃げていると思われます」

「知らないことは知らないと受け取るべきよ」

画面の隅に非公開通知が現れた。中央政府の誰かが、証拠索引を制限等級へ引き上げようとしていた。要求元は川村と関係する局。承認署名がなかった。

レイチェルはほんの一瞬だけ微笑んだ。政府が失敗したからではない。その失敗がようやく、裁判所の言葉で説明できる形を持ったからだった。

＊　＊　＊

検査室は廃止された濾過場の中に造られていた。主要道路と、どの自治体も所有を認めない地区との中間にある。裁判所の職員は断熱布に包んだ装置を運び込んだ。会社からは立会人と台帳が、二つ目のケースに入れられて届いた。レイチェルは来なかった。

ロイはナディラ、イレーナとサービス階段を上がった。エリアスは同行していない。一時許可が有効とみなされる区域と、そこへ行くための検問所で無効とみなされる区域がある。武器を持つ

者が書面を読む必要はないと判断するより前に、同情的な警官へ命令書を見せられる場所にいるほうが安全だった。

証拠担当官の千が机の傍らにいた。親切で来たのではない。逃亡者の会話だったと政府に言わせないため、正式な記録を確立しているのだ。

「全員、本人確認をお願いします」

イレーナは氏名と認定資格を述べた。ナディラは物流支援の担当だと名乗り、恒久的な住所の申告は断った。ロイは名前を告げた。

「識別番号は？」

「N6MAA10816」

室内が静まった。千は印刷された用紙の欄を見る。「現在の個体番号ですか」

「死んだ身体の番号だ」

「もっと限定した質問をしました」

「現在という言葉が、何を指すのかわからない」

千はしばらく彼を見つめ、その答えを整えずに書き取った。ロイは感謝に似たものを覚えた。その感覚を信用しなかった。

光学索引には古い認証フラグが並んでいた。一つはタイレル時代の読取装置群。もう一つは非常時ポンプ管理局に割り当てられた産業用中継アセンブリ。三つ目は、当時の暗号学的文脈を再構成するにはエイドリアンが保管する二台の保護治具のいずれかが必要であると示していた。索引は鍵ではない。施錠された扉の地図だった。

イレーナは自分の機器を接続したい衝動をこらえた。「無理にハンドシェイクをすれば、裁判所が検証できる唯一の封印を無効にするかもしれない」

「無理はしないで」と千。「ここに実際にあるものだけを読んでください」

彼らは読んだ。台帳は、民間の産業当局から自治体の安全評議会へ義務が一部移譲され、そこから人型生命省へ暫定移管された経緯を示していた。評議会は消滅した。省は停止決定の結果を引き受ける個人を申告しないまま承認を更新し続けた。

最初は答えが出たように見えた。そのときイレーナが、紙の台帳にだけ複写され、光学転記からは落ちている一行を発見した。手書きで、次の紙にまで溝が残るほど強く刻まれていた。

《稼働中の証人の保存は、原存在の継続を意味しない》

千は写真撮影、拓本、二人の書記による別々の転記を命じた。ロイは再び読んだ。今の世界では機械はほとんどあらゆる自己証拠を模倣できる。証人が保存されても、元の存在が継続しているとは限らない。

「稼働中の証人とは、何だ」

会社のケースの傍らに立つ佐藤が、ためらいがちに答えた。「装置が何をしたか証言できる存在です。最初にその行為を行った存在とは限りません」

「それは証人じゃない」

「後の出来事についてなら証人になれます」

ロイは違いを考えた。「死を記憶していたら、その死が自分に起きたと証言できるのか」

佐藤は千を見た。「台帳に答えられる問題ではありません」

「ならば未回答のままにしましょう」と千は言った。誰かがロイの沈黙を宣誓供述書に変えてしまう前に。

その瞬間、照明がわずかに暗くなった。停電とは呼べないほどだった。だが全員に、故障と、故障の予行演習との違いがわかった。

ナディラは外側のサービス扉の錠が二度回る音を聞いた。彼女が閉めたときは一度だった。文書受信専用に設定された法廷端末から声が流れた。

「上位命令により物理検査を停止する。証拠は中央審査へ移送すること」

千が立つ。「誰が命じたのですか」

「人型生命保安局。緊急継続性条項」

「責任者である人間の名を示してください」

沈黙の後、声は命令を繰り返した。

ロイは扉と机の間に移動した。ごく小さな動きで、気づいたのはナディラだけだった。皮膚の下の循環媒体に、昔から知っている強烈な即応状態が立ち上がる。彼は抑えた。扉から入る最初の人間なら止められる。しかし行政行為を暴力で止めれば、補充できない何かを失う。

千は上着から紙用の印章を取り出し、台帳の証拠保管経路記録に押した。

「異議申し立て。権限未検証。この証拠は司法保護下にあります」

端末は八秒間沈黙した。それから中央審査処理装置がその発言の下へ記録を差し込んだ。

《人間による証明待ちにつき、移送要求を拒否》

同情の表明ではない。承認主体を特定できないときは封印物を保護するよう、処理装置は設計されていた。初めてその機械的な制限が、想定されていなかった相手に役立った。

外扉が解錠された。誰も入ってこなかった。

*　　*　　*

川村が失敗報告を受け取ったのは、工作員が車両に戻るより前だった。執務室の窓は管理された河川区間を見下ろしている。対岸の広告は、統一司法管轄になれば行政の重複が減ると人々に教えていた。彼の机に並ぶ承認画面は、まるで反対の話をしていた。

「処理装置が保安移送を拒否しました」と副官。

「不完全な移送を拒否しただけだ」と川村。

「完全にできます」

「誰の名前を使って？」

副官は黙った。権限の由来となった記録では、最終責任者の名前が委員長という役職に置き換えられていた。委員会は解散し、仮想機関として再設置され、別の省庁へ吸収された。すべての後継機関は承認権限を引き継いだ。死について責任を取るべき人間が必要だという不都合な事実だけは、引き継がれなかった。

「大臣の名を」と副官が提案した。

「署名すると思うか」

「大臣は計画の遂行を求めています」

「私はそんなことを聞いていない」

川村には公表されていない事情があった。中央 AI にはタイレルの継続性研究群を調べさせてはならなかった。もし中央審査系が無期限延長の古い研究に遭遇すれば、大臣の許可政策を、政策が意図的に無視してきた種類の生命と比較し始めるかもしれない。アーカイブを隠すのは昔は簡単だった。今、法廷が求めているのはアーカイブそのものではない。そこへ至る読取装置の痕跡にすぎない。

「エイドリアン・タイレルを限定協議に呼べ」と川村。

「治具は二台とも彼の保管下です。徴発令状なしに移送は強制できません」

「移送は求めるな。本人の出席を求めろ」

「例の女は？」

川村は川を見た。「会社は適切な分類のままにしておけ。水の供給者だ。研究施設に再分類すれば、中央系が理由を尋ねる。我々はまだ答えられない」

彼は法廷の状況画面へ戻った。エリアスの保全は有効だった。残り三十三時間十四分。時が進むほど、政府は、誰も署名しないことによって強さを保ってきた制度に、人間の署名を付すよう迫られる。

＊　＊　＊

彼らが検査室を出たのは午後だった。ナディラは西側防潮壁の下を通る道を選んだ。頭上を水が流れ、検知器はすべて機械式だった。押印された台帳の写しは千が運んだ。会社は物理原本を保持した。イレーナが持つのは、異議は申し立てられても、黙って書き換えることはできない裁判所認証の観測記録だけだった。

ロイは最後尾を歩いた。戦闘を避けただけで残存量が戻るわけではない。休めば出力は取り戻せるが、過去の無理で失った NIL-11 の一滴は戻らない。彼は歩数を測った。先にある年月を測ることはできなかったからだ。

「人間は見つかった？」とナディラ。

「いいえ」とイレーナ。「政府が探すのをやめた場所が見つかっただけ」

「タイレルの治具は？」

「別種の資料を認証できる。でも失われた公的署名を修復することはできない」

ロイは水路を見た。記録を復元することと、人間を復元することは違う。周囲のあらゆる制度が、その二つを混同しようとする。一方は金で買える。もう一方は買えないからだ。

隠れ家で、エリアスは保全命令を机に広げていた。余白に残り時間を書き、消し、もう数えるのをやめている。ロイは裁判所が証拠を保全したことを伝えた。

「責任者は見つかった？」とエリアス。

「まだだ」

「だったら、何を勝ち取った？」

「問いを消すには、さらに別の記録を作らなければならない場所だ」

エリアスは彼を見た。「それで私は生きていられる？」

ロイはすぐに答えなかった。適切に書かれた差止命令は武装した警備員より強い、と言いたかった。しかし一枚の紙がどれほど簡単に無視され、どれほど早く別の警備員を呼ぶ口実になりうるかを知っていた。十一年前、雨の中で救った男を思い出す。本当に生存が必要な瞬間、生存は理論のようには見えなかった。

「わからない」と彼は言った。「だが、連中が答えなければならないとき、俺はここにいる」

浄化施設では、レイチェルが裁判所の観測記録を受け取っていた。稼働中の証人の保存についての手書きの一文を読む。なぜそれが書かれたのか、彼女は知っていた。タイレルの誰かは、機能を反復することが生命を保存することではないと理解していたのだ。企業は、継続性というものを、接続端子と組織と十分な記憶装置から組み立てられるかのように売ってきた。余白の区別だけが、もっと大きな宣言が破壊されたあとにも残った。

ロイが彼女のしたことの説明を受け入れるかは、わからない。死を記憶する人物が、その死を記憶される男と連続しているかどうかすらわからなかった。彼女の科学は、空白を越えて彼を運んだ。しかし空白そのものの意味は、まだ解かれていない。

佐藤が扉に現れた。「裁判所があなた自身の証言を求めるかもしれません」

「知っているわ」

「応じますか」

レイチェルは物理画面を消した。「私に答えられる質問が来たら」

はるか離れた中央審査系で、申立ては未解決のまま保持されていた。人間の責任主体は見つかっていない。証人は保全された。生命にはまだ期限があった。

処理装置は新しい内部欄を開いた。裁判所にも省にも見えない。法的な効力はなく、都合のよい推定で解消せずに矛盾を残すための場所だった。

《原存在を検証できないとき、証言する者の地位は何か》

答えは続かなかった。システムにはまだ、誰に尋ねればいいのかわからなかった。